



場合分けはできているか

中3・高3が卒業し、塾は新年度を迎えました。学校の入学・進級は4月からですが、ひと足早く前学年のまとめと新学年の予習に取りかかりましょう。また春期講習の中学生の科目は例年、理科と社会だけに絞っています。これにはいくつか理由があって、その一つ目は学習したことを忘れやすい科目なのにも関わらず、学年のまとめをほとんどできていない人が多いからです。もう一つは、入試での配点が国数英と同じなのに、復習がつい後回しにされがちな科目だからです。1週間しか時間が取れませんが、自分で弱点や課題に気づくきっかけになればと思います。

さて、学年の最後に習うところの単元でつまずく中1と中2が毎年います。中1の英語ならば be 動詞と一般動詞の区別がやっとできるようになり、三単現の s と複数形の s との違いも理解できてきた時に現在進行形を習い始めて戸惑ってしまうのでしょうか。be 動詞と一般動詞の両方が登場してしまうのですから。中2は受け身の文とそれに必要な過去分詞に不規則変化が出てきたあたりから混乱してきます。数学でも中1で習う「おうぎ形の面積」などはどう手をつけていいのかわからないまま、中3になってからも苦手な人がいます。このようにこんがらがってしまったら、まずは場合分けを試みましょう。「おうぎ形の面積」の例ならば、第一段階は中心角がわかっているのか、それとも弧の長さがわかっているのかだけに注目します。次にそれぞれに対応した公式を持ってきます。そして最後に半径の長さなどの数字を当てはめていきます。こうやって書いていくと「そんなの当たり前でできているよ！」という声が聞こえてきそうです。しかし最近、ちょっとでも複雑な問題に出会うと「冷静に場合分け」という作業ができなくなっている人が増えているように感じます。タッチボタン一つで自動的に解決することが多くなっているからでしょうか。一歩立ち止まって考えることが苦手なのです。そこで新年度の目標の一つに“粘り強く考え、取り組むこと”を挙げておきます。それが結局「急がば回れ」なのですから。